

日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳  
—村上春樹(著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える—

山木戸 浩子  
(藤女子大学)

**Abstract:**

*The speech of some characters in Japanese literature includes nonstandard forms (including regional and social varieties), which can affect readers' understanding of these characters' attributes and even of the story as a whole. It is considered difficult to translate nonstandard forms into other languages while maintaining the same impressions and effects as in the original, and the way translators interpret and deal with such variants is crucial. This paper analyzes, as a case study, how the distinctive characteristics observed in the Japanese used by Nakata, one of the two main characters in Haruki Murakami's Umibe-no Kafuka (2002), are translated into English by Philip Gabriel. Whereas some of these features, such as his use of elderly male language and honorifics, can be stereotypically associated with attributes of Nakata, others such as his use of his surname to refer to himself and his unconventional use of katakana syllabary are idiosyncrasies peculiar to him.*

1. はじめに

日本語で書かれた文学作品が他言語に翻訳される際、もしそれが(例えば日本語と英語のように)二言語間における言語・文化の距離がかけ離れていけばいるほど、語・句・文法・テキスト構成など、さまざまなレベルにおいて完全に一对一の対応をしておらず、翻訳者の解釈と判断が重要になってくる。また日本語は、地域変種や社会変種など、言語変種が豊かな言語であり、作品の作り手は登場人物のキャラクター形成のために言語変種を意図的に使用することがある。金水(2003)は、「ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができる時、その言葉づかいを「役割語」と呼[ん]」でいるが(p. 205)、フィクションの台詞に役割語を使用すると、その「話し手の属性を受け手にただちに伝えられる[...]」(金水 2016, p. 5)という利点がある。例えば、ある登場人物が関西弁あるいは男ことばを話せば、話者は「関西

の出身者」「男性」という人物像にそれぞれ結びつけられ、よって<関西弁><男ことば>は役割語である。(本稿では、金水(2003, 2014)に倣い、こういった役割語のラベルを山カッコに括って示す。)このように、役割語は話し手の特定の人物像(金水(2016)では、上に挙げた「年齢、性別、職業、階層」に加え、居住地、国籍・民族などの「社会的・文化的グループに対応するもの」に限定)とステレオタイプ的に結びつけられる話し方であり、その知識はその言語共同体の多くの話者によって共有されていなければならない(ibid.)。一方、登場人物の中には、特徴的な話し方をするが、その話し方は役割語ではない場合がある。例えば、話し手の社会的属性とステレオタイプの結びつきが認められるものの、言語共同体のほんの一部の受容者にしか認知されていない話し方や、子ども向けのアニメーションに登場する(本来ことばを話すはずのない)動物のキャラクターが話す特定の言語変種などである。このような役割語とは言えないキャラクター特有の話し方の類型は「キャラクター言語」と呼ばれ、本稿でも「役割語」と「キャラクター言語」を区別して扱う(「役割語」と「キャラクター言語」の違いについての詳細は、Kinsui & Yamakido(2015)、金水(2016)を参照のこと)。

翻訳において、「さまざまな言語変種をどう訳出するかは、実践においては大きな困難を伴[う]」(吉田・坪井 2013, p. 167)といい、その困難さについてはこれまでに Nida (1972)、Yau (2014)、Colina (2015)等によって指摘されてきた。日本語の標準的ではない言葉づかいが話し手のキャラクター形成に使用されているのであれば、翻訳者は作り手の意図、受容者に与える印象や及ぼす効果は何であるのか、またその変種を使っているということが社会的にどのような意味を持っているのかを理解しなければならず、翻訳者の解釈と判断がいかに重要であるかがわかる。本稿では、ケーススタディとして、村上春樹によって書かれた長編小説『海辺のカフカ』(2002)に登場するナカタさんの特異な話し言葉に焦点を当て、そこに観察される特徴が英語翻訳版 *Kafka on the Shore* の翻訳者である Philip Gabriel 氏によって英語でどのように対応されているかを考察する。村上春樹の作品は世界の数多くの言語に翻訳されており、特定の言語における具体的な訳出の方法の分析や特定の作品の言語間の翻訳の比較など、日本語の文学作品の他言語への翻訳の質について議論するのに適していると思われる。特に、『海辺のカフカ』には標準的ではない言葉づかいをする人物が複数登場し、言葉づかいがそれぞれの人物の描写にも関わっているが、とりわけナカタさんの話し言葉に観察される特徴は、役割語とキャラクター言語の2つのタイプに分けることができる。初老の男性らしい言葉づかいや敬語、自称詞としての苗字の使用や意図的なカタカナ表記の使用など、翻訳する上で困難であると思われるような要素も多数観察されるが、Gabriel 氏のどのような解釈と判断でもって、ナカタさんの話し言葉の特徴は英語にどう翻訳されているのであろうか。特に主語の人称の問題の対処については、Gabriel 氏へのインタビューも紹介する<sup>1</sup>。

## 2. 分析対象の登場人物の説明

まず「ナカタさん」とは一体どのような人物なのか。洋泉社編集部(編)(2013)では(1)のように紹介されている。

(1) ナカタさん: 偶数章の主人公。60歳すぎ。子供の頃、疎開先で「お椀山事件」に遭遇し、以

来読み書きの能力と記憶を失うが、それ以前は秀才だった。現在は都から補助を受けながら暮らしている。猫と会話ができるため「猫探しの名人」に。佐伯さんと同じく影が半分しかない。すこし風変わりなしゃべり方をし、ウナギが好物。亡父は大学で金融論を教える先生、2人の弟は伊藤忠と通産省に勤めている。(p. 69)

(1)の中で特に言語能力・言語運用に関わる点に着目すると、ナカタさんは子どもの頃に起きたある出来事を境に読み書きの能力と記憶を失い、猫と会話ができ、「すこし風変わりなしゃべり方」をするということである。そのしゃべり方については、例(2)に示すように、ナカタさんと会話をする人間や猫はたいいていそのような印象を持ち、またナカタさん自身もそのことを自覚しているようである。(2)aのオオツカさんは猫、(2)bのコイズミさんは人間である。例における下線は引用者による。これ以降も同様である。)

(2) a. 「しかし、あんたは人間にしても、いささか変わったしゃべり方をするねとオオツカさんは言った。

「はい、みなさんにそう言われます。しかしナカタにはこういうしゃべり方しかできないのです。普通にしゃべりますと、こうなります。頭が悪いからです。昔から頭が悪かったわけではないのですが、小さいころに事故にあいまして、それから頭が悪くなったのです。字だってかけません。本も新聞も読めません」 (村上 2002a, p. 79)

b. コイズミさんの奥さんはナカタさんに感謝した。[...] 風変わりな老人だし、奇妙なしゃべり方をするが、猫探しとしての評判は高いし、悪い人には見えない。 (ibid., p. 205)

さらに、ナカタさんの「すこし風変わりな話し方」は読者にも強い印象を与えるようである。実際に、『海辺のカフカ』公式ホームページでは、村上春樹氏に「登場人物の中ではナカタさんが好きです。あの独特な言葉づかいも伝染してきますが、[...]」(村上 2003, p. 129)、「私はどうもナカタさんが気に入ったようで、読んでいるうちに彼の口調が癖になってしまいました」(ibid., p. 168)と報告する読者からのメールが紹介された。

ナカタさんの会話は、全 49 章のうち 16 の章に出てくるが、発音は明晰で、文法的な間違いは見られない。確かに彼は「長い説明をするのがとりわけ苦手」(村上 2002a, p. 285)であり、「きわめて限定された語彙の中で生きて」(ibid., p. 371)いるのであろう。また、抽象的な概念(e.g. 「架空の痛み」「投資」「無限」)を理解することに難しさを感じており(ibid., p. 211, p. 365, pp. 370-371; 村上 2002b, p. 128)、ことわざも文字通りにしか理解できない(ibid., p. 44, pp. 209-210, p. 237)。しかし、彼の発話自体は意味的に問題がないように思われる。それでは、ナカタさんの話し言葉のどのような点が特徴的であり、また、周りの人間や猫、そして読者に「すこし風変わりなしゃべり方」をするという印象を与えるのか。

### 3. ナカタさんの話し言葉の特徴

ナカタさんの話し言葉の特徴は主に 2 つのタイプに分かれる。1 つ目は、ナカタさんの人物像とステレオタイプ的に結びつく特定の言葉づかい(「役割語」)、2 つ目は彼と話した人間や猫、そし

て読者が感じる「すこし風変わりなしゃべり方」を作り出す言葉づかい(「キャラクター言語」)である。

### 3.1 ナカタさんの台詞に観察される役割語

まず、ナカタさんの台詞に観察される役割語、つまり彼の人物像(属性)とステレオタイプの結びつく言葉づかいを考察する。偶数章の主人公であるナカタさんの会話は第 6 章で初めて登場するが、この章は「初老の男」が猫に「こんにちは」と話しかけるところから始まる。

#### (3) 「こんにちは」とその初老の男が声をかけた。

猫は少しだけ顔をあげ、低い声でいかにも大儀そうに挨拶をかえした。年老いた大きな黒い雄猫だった。

「なかなか良いお天気でありますね」

「ああ」と猫は言った。

「雲ひとつありません」

「……今のところはね」

「お天気は続きませんか？」

「夕方あたりからくずれそうだ。そういう心配がするな」と黒猫はもぞもぞと片足をのばしながら言った。それから目を細め、あらためて男の顔を眺めた。

男はにこにこ微笑みながら猫を見ていた。

猫はどうしたものかと少しのあいだ迷っていた。それからあきらめたように言った、「ふん、あんたは……しゃべれるんだ」

「はい」と老人は恥ずかしそうに言った。そして敬意を示すように、よれよれになった綿の登山帽を頭からとった。「いつでも、どのような猫さんとでもしゃべれるというわけではありませんが、いろいろなことがうまくいけば、なんとかこのようにお話をすることができます」

「ふん」と猫は簡潔に感想を述べた。

(村上 2002a, pp. 76-77)

初老の男が猫と会話をしている。しかも、世間話の定番である天気の話から会話を始めている。なんともおかしく、不思議な光景である。猫は会話にあまり積極的に参加しておらず、かなりぶっきらぼうな態度である。一方、その男は猫と対照的であり、「にこにこ微笑みながら」「恥ずかしそうに(言った)」「敬意を示すように、よれよれになった綿の登山帽を頭からとった」などの描写からも分かるように、礼儀正しく、控えめな優しい気持ちで猫に接しているのが感じ取れる。この違いは言葉づかいにも表れており、猫は「～だ」などの非丁寧体を使っているのに対し、男は「～ます」の丁寧体を使っている。実は、この会話(3)のすぐ後で、その「初老の男」の名前が「ナカタ」であることが分かる。「ナカタ」という名前は、この 1 つ前の偶数章(第 4 章)の最後の方に、「ナカタサトル」というフルネームで出てくる。第 4 章は「お椀山事件」((1)参照)についての記述で、1944 年 11 月、ある教員の引率のもと、山梨のある山奥(通称「お椀山」)に野外実習へ出かけた 16 名の児童全員が昏睡したとある。その 16 名の児童の中に「どうしても意識を回復できなかった男の子」がおり、その男の子の名前が「ナカタサトル」であったと書かれている。)読者はここで、その男の子、ナカタサトルが「事件」の後どういう経緯を経てだかわからないものの、現在もなお生きており、年

齢は初老の域に達していることを知る。また、小学生のときに彼の身に起こったことを考えると、猫と会話ができるという不思議な能力を持っているのもなんとなく受け入れてしまう。ナカタさんとこの猫(会話の途中、ナカタさんに「オオツカさん」と名付けられる)の会話はこの章の最後まで続くが、彼に関する多くのことはオオツカさんとの会話から知ることになる。(1)に述べられたような情報も、この章ではほぼカバーされている。

### 3.1.1 ナカタさんの年齢と結びつく役割語(<老人語>)の使用

まず、ナカタさんの年齢とステレオタイプ的に結びつく特定の言葉づかい(役割語)について考察する。彼は60歳過ぎであり((1)参照)、これは第6章の冒頭で彼が「初老の男」として登場した後、章の後半で本人が「しかしオオツカさん、今となりましてはナカタはもう60をとくに過ぎました。[...]」(ibid., p. 86)と言っていることからわかる。それでは、彼の話し言葉に「初老(の男)」らしい特徴は観察されるのかというと、作品を通して俗語や若者言葉が使われることはなく、いかにも老人らしい言葉づかい(金水(2003, 2014)に倣い、<老人語>と呼ぶ)が僅かに使われている。「腰をおろす」「いやいや」「いささか」「元来」「皆目」などの語句に加え、以下(4)に示すように、会話の中に打ち消しの助動詞「ない」に相当する<老人語>「ん」が現れている(e.g. 「おらん」「わからん」「ならん」。「おらん」は動詞「いる」に相当する<老人語>「おる」に「ん」が結びついた形である。詳細は金水(2014)を参照のこと)。(例(4)のそれぞれの引用の後ろには、括弧に出典が記されており、「→」は発話の聞き手を指す。例えば、(4)aの「→ 星野さん(人間)」は、「ナカタさんから星野さん(人間)に向けられた発話」であることを意味する。これ以降も同様である。)

- (4) a. 「それが、ナカタもよく覚えておらんのです。どこかずっと遠いところにおいて、[...]」  
(→ 星野さん(人間); 村上 2002b, p. 42)
- b. 「[...] ナカタもまだそんなものを開けたことはありませんので、よくわからんのです。開けてみないことにはわかりません」  
(→ 星野さん(人間); ibid., p. 143)

ただし、ナカタさんは作品を通して否定の標準形「ない」も使っており(e.g. 「いない」「わからない」)、彼の会話が出てくる16の章を通して、「ん」はほんの6箇所しか観察されないことから、「ない」の方がはるかに優勢であろう。また、著者である村上春樹氏が特定の場面で<老人語>を意図的に使ったのかどうかはわからない。

### 3.1.2 ナカタさんの「礼儀正しさ」と結びつく言葉づかい(敬語)の使用

次に、ナカタさんの敬語の使用について考察する。作品中に「ナカタさんはまじめで礼儀正しく、いつもにこにこしているの、近所の奥さんたちのあいだではとても評判がよかった。」(村上 2002a, pp. 203-204)という描写が出てくるが、作品を通してナカタさんは一貫して敬語を使っており、彼の礼儀正しい印象と結びつく。ナカタさんは会話の相手が人間であれ猫であれ、聞き手に対して敬意を表す「～です」「～ます」「～であります」を使用している。

- (5) a. 「実を言いますと、鯖はナカタもずいぶん好きです。もちろんウナギも好きですが」

(→ ミミさん(猫); 村上 *ibid.*, p. 137)

b. 「はい、みなさんにそう言われます。[...] 普通にしゃべりますと、こうなります。[...] 字だ  
ってかけません。本も読めません」 (→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 79)

c. 「[...] ナカタが今ふと思いついただけであります。名前がないと覚えるのに困りますので、  
適当な名前をつけただけであります。名前があるとなにかと便利なだけであります。[...]」

(→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 78)

また、ナカタさんの話し言葉には、丁寧語、尊敬語、謙譲語の語彙的な形式も観察される(e.g. 丁寧語「おる」、尊敬語「いらっしゃる」「お目にかかる」「召し上がる」、謙譲語「申す」「いたす」「存じ上げる」)。ナカタさんの一貫した敬語の使用は彼の礼儀正しい印象と結びついており、同時に読者にとって彼の人物理解につながっているのである。

### 3.2 ナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする特徴

ナカタさんの敬語の使用は、彼の礼儀正しさを考えるととても自然である。だが、彼は猫を含めどんな相手に対しても敬語を使用するため、「すこし風変わりなしゃべり方」をするという印象を与えてしまうのか。実はナカタさんの話し言葉には、彼のしゃべり方に「すこし風変わり」な印象を与える特徴が大きく 4 つ観察される。そして、これらの特徴はどれもナカタさんの人物像とステレオタイプ的に結びつく言葉づかい(つまり「役割語」)ではなく、ナカタさん限定のキャラクター言語である。確かにナカタさんには風変わりなところがあり、実際に((2)bにも示されるように)「風変わりな老人」であるという印象を抱いている登場人物もいるが、これらの 4 つの特徴のうち「風変わりな」性格とステレオタイプ的に結びつくものは 1 つもない。一方、読者(そして登場人物)は、ナカタさんの社会的属性と直接結びつかないこれらの言葉づかいの特徴 1 つ 1 つから彼のキャラクターについて新たな印象を感じ取り、それは彼の人物理解へとつながっている。同時に、これらの 4 つの特徴の組み合わせが彼の言葉づかい全体になんとも風変わりな印象を作り出しているのである。

#### 3.2.1 「であります」の使用

1 つ目の特徴は、上の 3.1.2 で挙げた「～であります」の使用である(例(5)cも参照のこと)。

(6) 「ゴマちゃんのことでありますが、ようやくひとつ情報が入りました。カワムラさんという方が、  
[...] 何日か前にゴマちゃんらしき三毛猫の姿を見かけたそうであります。[...]、年齢もガラも  
首輪の様子も、ゴマちゃんと同じでありました。[...]」 (→ コイズミさん(人間); *ibid.*, p. 204)

金水(2014)によると、「であります」は軍隊のイメージと結びつく語として用いられるという。

(7) であります(連語)

名詞・形容詞・副詞などに付き、丁寧語として働く言葉。

▶ 軍隊の構成員であることを示す場合、階級の低い者が上の者に向かって用いる(<軍隊語>)。[用例省略]

▶もとは連語「である」の丁寧体。明治時代にはさまざまなジャンルの文章で用いられたが、次第に同様の丁寧体「です」に取って代わられた。そのため、「である」の丁寧体の中でもより格式ばった表現とみなされるようになり、結果として軍隊という特殊な場で用いる言葉、さらには<軍隊語>と結びついたり考えられる(衣畑智秀・楊昌洙 二〇〇七)。

[用例省略]

[...]

(金水 2014, pp. 130-131)

2 つ目の語釈(「▶」)に書かれているように、「であります」は「である」の丁寧体であり、また「です」に取って代わられたことから、「です」への置き換えが可能である。実際に、(5)c と(6)における「であります」は全て「です」へ置き換えることができる。

ナカタさんはもちろん軍隊に属しておらず、その経験もない。それにも拘らず、彼はなぜ相手が誰であれ軍隊の中で「階級の低い者が上の者に向かって用いる」「格式ばった表現」の「であります」を頻繁に使うのかはわからない。しかし、これによって、彼が聞き手に対して絶対的な敬意を払っているだけではなく、忠誠を誓い、服従の念を抱いているような印象を読者に与えるのである(住田哲郎氏のご教示による)。

### 3.2.2 自称詞としての姓「ナカタ」の使用

ナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする 2 つ目の特徴として、自称詞としての姓「ナカタ」の使用を挙げる。彼は、会話の中で(相手が誰であれ)自身のことを「ナカタ」と苗字で呼ぶ。実際に彼の話し方に対して「すこし風変わり」な印象を抱いた猫のオオツカさん、人間の星野さんとの会話から、この特徴が観察される例を紹介しよう。

(8) a. 「[...] それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。[...]」

(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 80)

b. 「ホシノさんがそうおっしゃるのであれば、ナカタもそれをやってみようと思います。」

(→ 星野さん(人間); 村上 2002b, p. 44)

日本語のもっとも一般的な自称詞は「私」(一人称代名詞)であり、実際に例(8)における「ナカタ」はどちらも「私」に置き換えることができる。しかし、実際のナカタさんの発話に「私」の使用はほとんど見られない(作品を通して 4 回のみ)。それでは、ナカタさんはなぜ自身のことを「ナカタ」と呼ぶのであろうか。子どもが自身を(「私」ではなく)自分の名前で呼ぶことがあるが、これは名(first name)で呼ぶ場合であり、ナカタ(サトル)さんは「サトル」ではなく、姓の「ナカタ」を使用しているので、異なるタイプとして扱うべきであろう。

実は、自称詞としての自分の苗字の使用も、「であります」と同様、元々は軍隊の中で自分よりも階級が高い者を対象とした話し言葉で観察されるという(衣畑・楊 2007)。「であります」と併せて、自称詞としての姓「ナカタ」の使用もまた、彼がどんな相手であれ絶対的な敬意と忠誠心、服従の念を抱いているような印象を読者に与えるのである。

### 3.2.3 <幼児語>「～さん」の使用

これまでに見てきたナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする特徴 2 つは、どちらも軍隊の中で下の位の者が使うイメージと結びつくものであるが、彼の話し言葉は単に服従的で堅苦しく形式ばっている印象を与えない。これは彼の発話の内容や描写から伺い知ることのできる人柄ゆえなのであろうか。その可能性は十分考えられるが、それだけではない。3 つ目の特徴として、「～さん」の使用を挙げる。「さん」は「様」より親しみの気持を含めて、人の名前や人を表わす語などのあとにつけて(軽い)敬意を表す接尾辞であるが(『新明解国語辞典 第七版』(2012))、彼は発話内で対称詞や呼びかけ、三人称として「[姓]+さん」を使う(e.g. 「オオツカさん」(猫)、「星野さん」(人間))。これは、彼の礼儀正しさを考えると、3.1.2 で見た敬語の使用と同じく、自然であるように思われる。しかし、彼が「さん」をつける対象には、動物名(e.g. 「猫」「犬」と自然・物体名(e.g. 「雷」「石」)も含まれており、同様に対称詞や呼びかけ、三人称として使われている。

- (9) a. 「といたしますと、猫さん<sub><対称詞></sub>はどこかのお宅で飼われているんじゃないんですね  
(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, pp. 77-78)
- b. 「えーと、それで、あんたは……ナカタさんっていうんだね  
「そうです。ナカタと申します。猫さん<sub><呼びかけ></sub>、あなたは？」  
(←→ オオツカさん(猫); ibid., p. 77)
- c. 「ナカタはただ猫さん<sub><三人称></sub>の行方を探しているだけのものです。[...]」  
(→ 犬; ibid., p. 213)
- d. 「むずかしい問題であります。ナカタはさつきからずっと石さん<sub><三人称></sub>の話をしているのですが、まだそれほどうまく聞き取ることができません。[...]」  
(→ 星野さん(人間); 村上 2002b, p. 142)

例えば、同じ「猫さん」でも、(9)a は対称詞として、(9)b は呼びかけとして使われており、どちらも聞き手である猫のオオツカさんを指す。一方、(9)c の「猫さん」は三人称であり、特定の個体(ナカタさんが探している猫)を指している。さらに面白いことに、ナカタさんが使う三人称の「[動物]+さん」「[自然・物体]+さん」は、(10)に示すように、その動物や自然・物体の種類全体(つまり、総称)を指す場合にも使われている。

- (10) a. 「[...] このようにナカタは猫さん<sub><三人称・総称></sub>と少し話ができますので、[...]。[...]」  
(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, p. 82)
- b. 「[...] 相手が誰であっても、何であっても、話し合わないよりは話し合った方がいい。俺っちもトラックを運転しているときは、よくエンジンと話をするよ。[...]」  
「はい。ナカタもそう考えます。ナカタはエンジンさん<sub><三人称・総称></sub>とは話ができませんが、相手が誰でありましても、話し合うのはいいことです」  
(←→ 星野さん(人間); 村上 2002b, pp. 225-226)

例えば、(10)a の「猫さん」は、特定の猫ではなく、「猫」という動物のカテゴリーの総称、猫全体を

指している。それでは、ナカタさんは動物や自然・物体に敬称「～さん」を付けることによって、話し言葉にどのような印象を作り出しているのだろうか。岡崎・南(2011)は、ポピュラーカルチャー作品における「幼児特有の話し方」、つまり幼児の役割語(<幼児語>と呼ぶ)の語彙タイプ 3 つのうちの一つとして、「やわらかさをあらわす接頭辞「お」および人以外につく接尾辞「さん・たん・さま・ちゃん」等」を挙げており(他の 2 つの語彙タイプは「オノマトペ」と「その他」)、「[...]大人の言葉では接頭辞「お」・接尾辞「ちゃん・さん」等を付加する対象ではないものに用いることで、幼児(または養育者)の表現のやわらかさ・あどけなさ、対象に対する愛着等を表している」(p. 199)という。一方、実際にナカタさんの話し言葉に見られるのは接尾辞「～さん」のみであり、接頭辞「お」と共に現れることはない。また、接尾辞「ちゃん」や、岡崎・南(2011)のもう一つの<幼児語>の語彙タイプ「オノマトペ」を並行して使用することもない(e.g. 「ニャンちゃん」「ワンワン」)。しかし、一般的な大人であれば動物や自然・物体などの対象に「～さん」を付けるとは考えにくく、彼の話し言葉に「やわらかさ」が加えられているだけでなく、ナカタさんは幼児のように純粋で世間を知らないというような印象を与えるのである。

### 3.2.4 カタカナ表記の使用

ナカタさんの話し言葉を「すこし風変わり」にする 4 つ目の特徴として、カタカナ表記の使用を分析する。ナカタさんの発話の中には、漢字で書くのが一般的な語にもカタカナ表記が用いられている場合がある。

- (11) a. 「[...] とくにナカタのお父さんは、もうとっくになくなりましたが、大学のえらい先生でありまして、キンユウロンというものを専門にしておりました。それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。一人はイトウチュウというところでブチョウをしておりますし、もう一人はツウサンショウというところで働いております。[...]」

(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, pp. 79-80)

- b. 「[...] 都バスにはショウガイ者とくべつパスというものを見せれば、なんとかのすることはできますが」

[...]

「じゃあ、何をして暮らしているんだい？」

「ホジョがでます」

(←→ オオツカさん(猫); *ibid.*, pp. 80-81)

(11) a では「金融論」「部長」「通産省」、そして固有名詞「伊藤忠[会社名]」がカタカナで書かれており、(11) b では(元々カタカナで書かれるべき英語からの借用語「バス」「パス」に加え)「障害(者)」「補助」もカタカナで書かれている。それでは、なぜこれらの語にカタカナ表記が用いられているのか。さらに詳しく見てみると、これらは全て漢語の名詞であり、抽象度の高い意味を持つものが多い。一方で、「お父さん」「頭」「働いて」「見せれば」などの和語、漢語でも比較的簡単な「大学」「先生」などには漢字が使われている。漢字は一字一字が意味を持つのに対して(表語文字タイプ)、カタカナは単に音を表しているにすぎない(表音文字タイプ)。一般的にカタカナ表記が使われるのは外来語であるが、カタカナで書かれたこれらの語の意味・概念はナカタさんにとっ

て“foreign”である、つまりナカタさんは意味を理解しておらず、単なる音の羅列としてしか捉えていないのであろう。ただし、これはあくまでも表記上の違いのため、ナカタさんの話し言葉を視覚的に受容する読者のみを感じる特徴であるということをつけ加えておく。実際に読者はナカタさんの話し言葉の中に漢字に代わってカタカナで表記された語が出てくる度に、彼の言語能力・言語運用(語彙力や識字能力を含む)が一般的な大人とは異なっていることに気づかされるのである。

### 3.3 まとめ

ナカタさんの話し言葉の特徴は、大きく 2 つのタイプに分けることができる。1 つ目は役割語(彼の属性(年齢と礼儀正しさ)とステレオタイプの結びつく特徴的な言葉づかい)であり、2 つ目はキャラクター言語(彼の話し方を「すこし風変わり」にする特徴的な言葉づかい)である。「→」以下には、その特徴の使用によって表現されたナカタさんの印象を記す。

#### (12) 役割語

- i. <老人語>の使用(ごく僅か)(俗語や若者言葉の使用なし) [→ 初老らしさ]
- ii. 敬語の使用 [→ 礼儀正しさ]

#### (13) キャラクター言語 [→ 話し言葉に「すこし風変わりな」印象を与える]

- i. 「であります」の使用 [→ 聞き手への敬意、忠誠心、服従の念]
- ii. 自称詞としての姓「ナカタ」の使用 [→ (上に同じ)]
- iii. <幼児語>「～さん」の使用 [→ 純粹で世間を知らない]
- iv. カタカナ表記の使用 [→ 一般的な大人とは異なる言語能力・言語運用]

例えば、以下の(14) a のナカタさんの発話には(13)に挙げた 4 つの項目が全て観察されるが、特徴的な部分(下線部)を(14) b のようにそれぞれより一般的な形に替えてみると、「風変わり」な印象が随分薄れるのは明らかであろう。

- (14) a. 「はい。行方のわからなくなった猫さんを探すのであります。このようにナカタは猫さんと少し話ができますので、あちこちまわってジョウホウをあつめまして、いなくなった猫さんの行方をうまく探しあてることができます。それでナカタは猫さん探しの腕がいいということになりまして、あちこち迷子の猫さんを探してくれと頼まれるのであります。[...]

(→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 82)

- b. 「はい。行方のわからなくなった猫を探すのでです。このように私は猫と少し話ができますので、あちこちまわって情報をあつめまして、いなくなった猫の行方をうまく探しあてることができます。それで私は猫探しの腕がいいということになりまして、あちこち迷子の猫を探してくれと頼まれるのでです。[...]

## 4. ナカタさんの特徴的な話し言葉の英語翻訳

ナカタさんの話し言葉の特徴は、『海辺のカフカ』の英語版 *Kafka on the Shore* の翻訳者である Philip Gabriel 氏によって英語でどのように表現されているのだろうか。原著で読者がナカタさん

の話し言葉に受けた同様の印象や反応を英語版でも引き出すことは重要であり、特に彼の「すこし風変わり」な話し方に関しては、作品中で何度か他の登場人物にそう言われているため((2)参照)、英語においても「すこし風変わり」でなければならないが、実際にその印象は保たれているのだろうか。もしそうであれば、それは具体的にどこからくるのか。この問題について確かめるため、筆者は英語母語話者 12 名を対象にアンケート調査を実施した。サンプル数がごく少量であるため、7~8 割を超えた回答のみを参考にし、以下に示す<sup>2</sup>。また、特に自称詞としての姓「ナカタ」の使用の対処については、Gabriel 氏にメールによるインタビューを行った(2015年11月8日)。本セクションでは、ナカタさんの話し方に「すこし風変わりな」印象を与える 4 つの特徴((13)参照)への対応を中心に分析するが、まず初めに役割語(<老人語>と敬語)((12)参照)への対応を考察する<sup>3</sup>。

#### 4.1 役割語への対応

原著におけるナカタさんの話し言葉には、<老人語>(彼の年齢(60歳過ぎ)とステレオタイプ的に結びつく語句や語法)が(ごく僅かではあるが)観察され、俗語や若者言葉も使われていない。また、ナカタさんの一貫した敬語の使用は、彼の礼儀正しさと結びついている。それでは、これらは英語翻訳版でどのように対応されているのであろうか。

##### 4.1.1 <老人語>の使用への対応

アンケート調査の結果によると、英語版におけるナカタさんの発話から感じ取る「老人らしさ」は、主に彼が話す内容からきており、具体的に言葉づかいにはほぼ表れていないという。ただし、英語においても俗語は使われておらず、比較的「“old-fashioned”(時代遅れ、昔風の)」「“mature”(熟年の)」等のイメージを持つと思われる語句の使用も認められると報告されている。彼の会話が初めて出てくる第6章から例を挙げると、“Hello, there.”(cf. (ST)「こんにちは」)、“a (very nice) spell of weather”(cf. (ST)「なかなか良いお天気」)、“converse”(cf. (ST)「しゃべる」)、“Boy oh boy, [...]”(cf. (ST)「いやいや」)などがある。また、「ありがとうございます」などの感謝の言葉は、典型的な“Thank you so much.” “I’m grateful to you.” などに加え、“Much obliged.”とも訳されている<sup>4</sup>。比較的古風な語句を意図的に用いることにより、ナカタさんの老人らしさが英語の言葉づかいの中にも表現されているのである。

##### 4.1.2 敬語の使用への対応

アンケート調査の結果によると、英語におけるナカタさんの会話は、「丁寧すぎる」「極端に礼儀正しい」ということはなく、自然な「丁寧さ」「礼儀正しさ」が保たれているという。それでは、この印象は一体どこからくるのか。英語には日本語の敬語に相当するような言語形式が存在しないが、英語における丁寧さ・礼儀正しさを表す典型的な例として、“I beg your pardon.” “Pardon me.” “Excuse me.” などの謝罪の表現や、“Thank you so much.” “Thank you kindly.” などの感謝の表現があり、ナカタさんは話し言葉の中でこれらを使っている。また、丁寧さの違いが表れる表現形式の一つに依頼があるが、ナカタさんは直接的な命令文ではなく、“Would you V?” “Could you V?” “Would you mind ~?” など、間接さの程度の高い依頼表現を選択している。相手に許可を求

める表現形式も同様に、丁寧度の高い “Do you mind if I V ~ ?” “Would you mind if I V-ed ~?” が使われている。

- (15) a. 「すみません。ナカタにはあなたがたのおっしやっていることがうまく聞きとれないようです」 (→ ゴマとミミ(猫); 村上 2002a, p. 282)  
“I beg your pardon, but I can’t understand [...].” (p. 150)
- b. 「[...] もう一度繰り返していただけますか？」 (→ カワムラさん(猫); ibid., p. 130)  
“[...] Would you mind repeating that?” (p. 72)
- c. 「それでは猫さんのことを、オオツカさんと呼んでよろしいでしょうか」 (→ オオツカさん(猫); ibid., p. 78)  
“Would you mind very much, then, if I called you Otsuka?” (p. 44)

このように、ナカタさんは英語の丁寧な謝罪・感謝の表現、依頼・許可の表現形式を選択・使用しており、実際に英語版の読者もこれらの言葉づかいから彼の礼儀正しさを感じ取るのである。

#### 4.2 ナカタさんの話し言葉に「すこし風変わりな」印象を与える特徴への対応

それでは、ナカタさんの話し言葉の中で「すこし風変わりな」印象をつくり出す 4 つの特徴が英語翻訳版でどのように対応されているのかを見ていこう。

##### 4.2.1 「であります」の使用への対応

まず、(i)「であります」への対応について考察する。上の 3.2.1 で「であります」は「である」の丁寧体であり、「です」への置き換えが可能であると述べたが、英語版において「であります」と「です」がそれぞれ異なって訳されるということはなく、どちらにも be 動詞が与えられている。例えば、ナカタさんは相手に同意するとき、よく「そうです」「そうであります」、「そのとおりです」「そのとおりであります」と言うが、どれもほぼ一様に “That’s right.” “That’s correct.” “That’s true.” などと訳されている。アンケート調査の結果によると、英語版の読者は、彼の話し言葉に軍隊の中で位の低い者が話しているような服従的な印象を受けておらず、また「であります」の使用に相当するような表現も観察されていない<sup>5</sup>。以上、「であります」の使用は、英語翻訳版において直接的な対応が見られないことがわかる。

##### 4.2.2 自称詞としての姓「ナカタ」の使用への対応

次に、(ii) 自称詞「ナカタ」の使用について考察する。英語翻訳版においても、自称詞として “Nakata” が使われている。以下の例(16)は猫のオオツカさんとの会話の一部であるが、ここでナカタさんは初めて自身を「ナカタ」と呼ぶ。その後いくつか会話が交わされ、オオツカさんは彼の名前が「ナカタ」であることを確認する。

- (16) 「あの、ここにちょっと腰をおろしてもかまいませんか？ ナカタはいささか歩き疲れましたので」

[...]

「えーと、それで、あんたは.....ナカタさんっていうんだね」

「そうです。ナカタと申します。猫さん、あなたは？」

(←→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 77)

“Do you mind if **I** sit down here for a while? Nataka’s a little tired from walking.”

[...]

“Um... I take it, then, that you’re Mr. Nakata?”

“That’s right. Nakata’s the name. And you would be?” (p. 43)

(16)に示すように、主語として現れた「ナカタ(は) (いささか歩き疲れました)」は、英語翻訳版でも固有名詞 “Nakata” のまま現れている(該当部分に下線)。だが面白いことに、この一つ前の彼の発話「ここにちょっと腰をおろしてもかまいませんか？」には主語の「私」が含まれていないのにも拘らず、翻訳では “I” が付け加えられている (“Do you mind if **I** ...?”)。日本語の文において主語は任意であり、「私がここにちょっと腰をおろしても...」と主語を明示しなかったとしても、文脈から主語が「私」であると特定できる。一方、英語の文においては(命令文を除き)主語を明示する必要があるため、ここでは “I” を付け加える必要があるのであろう。これ以降のオオツカさんとの会話でも、「ナカタ」は “Nakata” と訳され、原著で主語が現れていないところには “I” が補われている。

(17) a. 「はい。必要のないものはすぐ忘れるものであります。それはナカタも同じであります」

(→ オオツカさん(猫); *ibid.*, p. 77)

“[...] It’s easy to forget things you don’t need anymore. Nakata’s exactly the same way.”

(p. 44)

b. 「それでは猫さんのことを、オオツカさんと呼んでよろしいでしょうか？」 (p. 78)

“Would you mind very much, then, if **I** called you Otsuka?” (p. 44)

しかし、この規則(つまり「ナカタ」を “Nakata” に訳し、主語が省略されているところに “I” を補う)が全ての箇所でも適用されているかといえばそうではない。“I” が補われるはずのところに “Nakata” が使われているところもあれば、「ナカタ」が “Nakata” に訳されず、代わりに “I” が使われているところもある。それでは、英語版において一体どのような基準で “Nakata” と “I” の使い分けが行われているのであろうか。翻訳者 Gabriel 氏によると、ナカタさんの話し言葉の中で自称詞としての「ナカタ」の使用を英語でどのように扱うのかという問題について、主要な要素が 2 つあるという(2015年11月8日私信)。

(18) i. 翻訳においてもナカタさんの話し言葉がすこし風変わりに聞こえる必要がある(物語中で他の登場人物がそうコメントしているため)。

ii. 英語ではナカタさんの話し言葉に一人称代名詞を使う必要がある。

例(16)-(17)に見られるように、ナカタさんは自称詞として “Nakata” と “I” の両方を使っているが、

Gabriel 氏はこのパターンに決める経緯を以下のように語っている。

In my first drafts I tried translating his speech as it is into English, namely using *Nakata* every time he uses it in Japanese, and even omitting the first person pronoun sometimes. I soon discovered this would make his speech even stranger in English than it is in Japanese, so I was forced by the nature of English to include “I” a lot. To my mind this switching back and forth between *I* and *Nakata* isn’t ideal, but then again using *Nakata* alone for both *I* and *Nakata* makes for very unusual English (and is quite different from the Japanese original because it would greatly increase the number of times I used *Nakata*.) I decided readers would be overly distracted by that. (Too many *Nakatas*.) So--I ended up with a mix of *I* and *Nakata*, which I wasn’t so happy with but 仕方がない。 (ibid.)

初稿では、試しに彼の話し言葉をそのまま英語に訳してみた。すなわち日本語版でナカタさんが「ナカタ」を使うたびに“Nakata”を使い、ときに一人称代名詞の省略さえやってみた。しかし、これだと元の日本語より英語のナカタさんの話し言葉の方が奇妙になってしまうことがわかった。そのため、英語の特性に従って、“I”の多用を余儀なくされたのである。私の考えでは、“I”と“Nakata”の2つで行ったり来たりするのは理想的ではないが、“I”と“Nakata”の両方のところに全て“Nakata”を使うと、とても変わった英語になってしまう。(また、ナカタさんの話し言葉で“Nakata”が使われる回数が非常に増え、原著とかなり異なることになる。)これには読者も違和感を感じるだろうと判断した。(“Nakata”が多すぎる。)それで、私は“I”と“Nakata”を混合して使うことにしたのだ。これについては、たいして満足していないが、仕方がない。(拙訳)

原著でナカタさんは自称詞として一人称代名詞の「私」をほとんど使用せず、姓の「ナカタ」を使っている。しかし、日本語において主語の明示は任意であるという性質から、彼の話し言葉に「ナカタ」がしつこいほど次々と出てくるというような印象は受けない。一方、英語の文では主語を明示する必要があるが、原著におけるナカタさんの発話が文法的に間違っているわけではないので、明示されていない主語のギャップを何かで埋めなければならない。ただ、ナカタさんが原著でほとんど「私」を使わないからと言って、そのギャップ全てに“Nakata”を入れると、“Nakata”の出現回数が多すぎて、元々の話し言葉よりもずっとおかしくなってしまう。そのため、その代わりに“I”も使われているのである。

また、英語翻訳版において、一貫して「ナカタ」が“Nakata”に訳され、主語が省略されているところに“I”が補われているわけではないが、この使い分けについて、Gabriel 氏は以下のように語っている(2015年11月8日私信)。

[...] I think my only operating principle was to sprinkle the “Nakata” usage regularly throughout simply to remind readers of his “odd” speech. You indicate that in some cases I have used *Nakata* in parallel with its usage in Japanese, but I certainly was not conscious of

this. As I said, I simply wanted to use it regularly--once each time Nakata spoke, at least. I do not like how in English he switches back and forth between *I* and *Nakata*, but I saw no other way to handle it. (ibid.)

[...] [この“Nakata”と“I”の使い分けを]処理する際に私が唯一使った基本方針は、ナカタさんの話し言葉が「変わっている」ということを単に読者に思い出させるために、定期的に“Nakata”の使用を散りばめるということであった。日本語で「ナカタ」が使われているところと並行して、私も“Nakata”を使っているところがあるようだが、まったくこれを意識してやっていたというわけではない。ナカタさんが[自称詞として]“Nakata”を定期的に—彼が話す毎に少なくとも1回は—使うようにしたかった。英語でナカタさんが“I”と“Nakata”の2つで行ったり来たりするやり方は気に入ってはいないが、これ以外の方法が考えられなかったのである。(拙訳)

原著に従い、ナカタさんは英語の話し言葉の中でも“Nakata”を使っているが、元々の「ナカタ」が“Nakata”に訳され、主語が省略されているところに“I”を補うという法則に機械的に従っているわけではなく、彼の話し言葉の風変わりさを単に読者に気づかせるために、定期的に“Nakata”を使っているのである。アンケート調査では、実際に読者が英語のナカタさんの話し言葉を「“odd” (変わっている)」と感じるのは、主にこの“Nakata”の使用によると報告されている。英語の話し言葉で自称詞として自身の姓を使うこと自体が相当変であり、軍隊のイメージはもちろん、特定の属性とステレオタイプ的に結びつくこともないという。Gabriel氏は“I”と“Nakata”の両方を使用せざるをえなかったことについて好ましく思っていないようだが、英語版におけるナカタさんの話し言葉に「風変わりさ」が保たれているということから、この特徴の果たす役割は大きく、この方法は成功していると言えるであろう。

#### 4.2.3 <幼児語>「～さん」の使用への対応

原著のナカタさんの話し言葉で幼児の印象と結びつく「[動物]+さん」「[自然・物体]+さん」について、例えば対称詞として出てくる「猫さん」は全て“you”と訳されている。(ただし、1箇所のみ(例(9)a)、原著における対称詞としての「猫さん」の部分を補うかのように、“Mr. Cat”が呼びかけとして付け加えられている(p. 44)。)その他の「[動物]+さん」「[自然・物体]+さん」は全て三人称だが、特定の個体を指す場合であれ、その種全体を指す(総称)場合であれ、英語訳に接尾辞「さん」に相当するような語は与えられていない。

(19) a. 「ナカタはただ猫さん<三人称>の行方を探しているだけのものです。[...]」

(→ 犬; ibid., p. 213)

“Nakata’s just looking for a lost cat. [...]” (p. 43)

b. 「[...] このようにナカタは猫さん<三人称・総称>と少し話ができますので、[...]。[...]」

(→ オオツカさん(猫); ibid., p. 82)

“[...] I can speak with cats a little, [...]. [...]” (p. 46)

例えば、(19)a の「猫さん」はナカタさんが探している特定の猫を、(19)b の「猫さん」は「猫」という動物の種類全体を指すが、英語ではそれぞれ “a (lost) cat”、“cats” と訳されている。英語には話し言葉にやわらかさを与える<幼児語>「～さん」に相当するような接辞や語は存在せず、<幼児語>であると言っても、例えばオノマトペの「ニャンニャン」を使っているわけではないので、英語の幼児語である “kitties (< kitty)” などに訳すのもふさわしくないであろう。以上、ナカタさんの話し言葉で観察される<幼児語>「～さん」は、英語の翻訳版において直接的な対応は見られないことがわかる。

#### 4.2.4 カタカナ表記の使用への対応

最後に、4 つ目の特徴「(iv)カタカナ表記の使用」について分析する。ナカタさんの発話には漢字で書くのが一般的な語にもカタカナ表記が用いられている場合があり、それは、ナカタさんがそれらの語の意味・概念を理解しておらず、ただ音の羅列としてしか捉えていないことを読者に向けて視覚的に示すためであると述べた(3.2.4 参照)。

それでは、英語翻訳版でこれらのカタカナ表記の語はどのように表現されているのであろうか。英語で使用される文字はアルファベットのみであり、カタカナと同じく表音文字のタイプであるが、英語において音と綴りが必ずしも一対一の関係にないことなどうまく利用し、ナカタさんがこれらの語の意味を理解せずに使っていることを巧みに表現している。

- (20) a. 「[...] とくにナカタのお父さんは、もうとつになくなりましたが、大学のえらい先生でありまして、キンユウロンというものを専門にしておりました。それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。一人はイトウチュウというところでブチョウをしておりますし、もう一人はツウサンショウというところで働いております。[...]」

(→ オオツカさん(猫); 村上 2002a, pp. 79-80)

“Nakata’s father—he passed away a long time ago—was a famous professor in a university. His specialty was something called *theory of fine ants*. I have two younger brothers, and they’re both very bright. One of them works at a company, and he’s a *depart mint chief*. My other brother works at a place called the *minis tree of trade and indus tree*. [...]” (p. 45)

- b. 「[...] 都バスにはショウガイ者とくべつパスというものを見せれば、なんとかのことはできますが」

[...]

「じゃあ、何をして暮らしているんだい？」

「ホジョがでます」

(←→ オオツカさん(猫); ibid., pp. 80-81)

“[...] If I show my *handycap* pass, though, they let me go on the city bus.”

[...]

“Then how do we make a living?”

“I get a *sub city*.”

(p. 45)

まず、翻訳版でカタカナ表記の語に対応する語句は全てイタリック体で書かれている。(ただし、固有名詞「イトウチュウ(伊藤忠)[会社名]」は“a company”と、一般化され訳されている(波線部)。)例えば、「キンユウロン」“theory of finance”のように相当する英語が複数の語からなる場合は、内容語“theory”「(理)論」と“finance”「金融」が修正の対象となり、“theory”には間違った綴り“theory”が与えられ、“finance”はナカタさんが意味を理解して使っていると思われるような単純な語“fine ants”の2語に置き換えられている。“theory”と“fine ants”の発音はそれぞれ元々の語の発音に十分近い。このように、発音は元々の語の発音と同じか近くなるようにして、誤った綴りを与えたり、語を二分割しそれぞれを同じか似たような発音の語と入れ替えたりしているのである。後者のような「語句のこっけいな誤用のこと(特に音や形態が類似している場合に起こりやすい)」を「マラプロピズム(malapropism)」という(『現代言語学辞典』(1988), p. 381)。

(21) 誤った綴り	(正)	(ナカタさん)
a. キンユウロン (金融論)	theory of finance	→ theory of ...
b. ショウガイ (障害)	handicap	→ handycap
(22) マラプロピズム(malapropism)		
a. キンユウロン (金融論)	theory of <u>finance</u>	→ ... of <u>fine ants</u> <sup>6</sup>
b. ブチョウ (部長)	(a) <u>department</u> chief	→ <u>depart mint</u> ...
c. ツウサンショウ (通産省)	(the) <u>ministry</u> of trade and <u>industry</u>	→ <u>minis tree</u> of ... <u>indus tree</u>
d. ホジヨ (補助)	subsidy	→ sub city

その他、カタカナで表記された語の中には地名や建物・施設名などの固有名詞が含まれているが、英語翻訳版でのこれらの語への対応は一貫していない。例えば地名だと、「カラスヤマ(烏山)[東京都世田谷区の地名]」は“a place called Karasuyama”「「烏山」という所」と訳されているのに対し、音節ごとにハイフンで区切られているものもある(e.g. “Fu-ji-ga-wa”「フジガワ(富士川)」、「the To-mei (Highway)」「トーメイ(東名(高速道路))」)。(21)(22)に挙げたような一般名詞にはそれぞれ英語で対応する語句が存在するが、地名などの固有名詞は日本語でも英語でも基本的に同じ音で表され、英語版の読者にとって初めて目にするものも含まれるのであろう。従って、誤った綴りやマラプロピズムの方法を適用することができず、その代わりに音節ごとにハイフンで区切ることによって、ナカタさんがよくわからずにそれらの名称を使っていることが表現されている。

また、アンケート調査の回答の中で、Gabriel 氏のこういったカタカナ表記の語への対応は、ナカタさんの識字能力の欠如を読者に思い起こさせるのはもちろんのこと、「語を音としてでしか理解していない」「自分に関わりのないような抽象的な意味が理解できない」「流暢に話せない」「語を音節ごとに区切らなければ発音できない」など、母語を獲得中の子どものイメージとも結びつく報告されている。＜幼児語＞「～さん」への直接的な対応は観察されないものの(4.2.3 参照)、英語版の言葉づかいの中にもナカタさんの子どものような印象は保たれているのである。

## 4.3 まとめ

本セクションでは、原著に観察されるナカタさんの話し言葉の特徴が、英語翻訳版においてどのように対応されているのかについて考察した。彼の話し言葉の特徴は主に役割語とキャラクター言語の2つのタイプに分かれる。1つ目の役割語は、ナカタさんの人物像(年齢(初老)と礼儀正しさ)とステレオタイプの結びつく特定の言葉づかいであり、2つ目のキャラクター言語は、彼と話した人間や猫、そして読者が感じる「すこし風変わりなしゃべり方」を作り出す言葉づかいである。(表1)にその結果を示す。

(表1) ナカタさんの話し言葉の特徴と英語翻訳版における対応

ST:『海辺のカフカ』(日本語)		TT: <i>Kafka on the Shore</i> (英語)
表現したい印象など [☞: 読者に与えた印象]	特徴的な言葉づかい	対応
I. 人物像(属性)	<役割語>	
年齢:初老 [初老らしさ] ☞	i. 俗語・若者言葉の使用なし ii. <老人語>(語彙, 語法)の使用(ごく僅か)	◎ 俗語の使用なし ○ 古風な語句・表現の使用(語法なし)
礼儀正しさ [礼儀正しさ] ☞	敬語の使用	△ →丁寧度の高い謝罪・感謝・依頼・許可表現の使用
II. すこし風変りな話し方	<キャラクター言語>	
[会話の聞き手に対する敬意・忠誠・服従の念] ☞	i. 「であります」の使用 ii. 自称詞「ナカタ」の使用	× ○ (“I”も並行して使用)
[純粹さ・世間を知らない, 話し言葉にやわらかさが加わる] ☞	iii. <幼児語>「～さん」の使用	×
[言語能力・言語運用が一般的な大人と異なっていること] ☞	iv. カタカナ表記の使用	○ (一般名詞: 誤った綴り, マラプロピズム; 固有名詞: 音節ごとにハイフン切り)

(注:「◎: 英語版にそのまま適用」「○: 適用されているが、英語の特性に従い調整(調整の内容は括弧書き)」「△: 英語の特性によってそのまま適用できないが、他の方法を取り入れて補われている(「他の方法」は「→」以下に示す)」「×: 適用されていない」)

(表1)に示すように、ナカタさんの人物像と結びつく言葉づかい(タイプ I: 役割語)は英語版においてなんらかの形で対応が見られる。英語でも俗語を使わず、比較的古風な語句が使用されている。また、英語には日本語の敬語と同等の言語形式が存在しないが、他の方法で補うこと

によって、原著で表現されていた礼儀正しい印象は損なわれずにいる。一方、ナカタさんの話し方に「すこし風変わりな」印象を作り出す 4 つの特徴(タイプ II:キャラクター言語)のうち、直接的な対応が見られたのは「自称詞「ナカタ」の使用」と「カタカナ表記の使用」の 2 つのみであった。しかし、自称詞“Nakata”の使用だけでも、英語版の読者に彼の話し言葉の風変わりさを感じさせるのに十分であり、実際に物語の中で何人かの登場人物が抱いた「すこし風変わりな」印象と一致していることを認識させるためにも、とても重要な役割を果たしている。また、原著で読者が「<幼児語>「～さん」の使用」から受けたナカタさんの子どもらしい印象は、英語版における「カタカナ表記の使用」への対応が受け継いでいるのも面白い。このように、ナカタさんの英語の話し言葉には、Gabriel 氏の解釈と判断によって、原著では役割語の使用によって表現されていた彼の属性と結びつく特徴と、風変わりさを感じさせる要素が保存されつつ、話し言葉全体としては読者によって違和感を感じられることもなく、自然な話し言葉に訳されているのである。

## 5 結びにかえて

日本語と英語は言語間における言語・文化の距離がかけ離れており、語・句・文法だけでなく、使用される文字システム等、さまざまなレベルにおいて本質的に異なる。また、日本語には言語変種が数多く存在し、キャラクター形成のために変種が意図的に使されることがあるが、これが翻訳を一層困難にしているのである。本稿では、ケーススタディとして特定の文学作品の英語版の翻訳者が日本語の役割語やキャラクター言語に対して具体的にどのような訳出の方法を採ったのか(あるいは採らなかったのか)、そしてその判断の理由について考察した。ただし、本研究で得られた結果が役割語やキャラクター言語の翻訳全般に一般化できるわけではなく、また現時点では翻訳理論と日本語の役割語・キャラクター言語の理論を結びつける先行研究が少ないということもあり、多くの課題が残されていると考える。今後は、日本語の文学作品において観察される役割語・キャラクター言語の英語翻訳の分析のサンプルを増やし、同時に英語とは異なる特性を持つ他言語の翻訳版との比較も行っていく。これによって、役割語・キャラクター言語の研究の新たな発展だけでなく、日本語の文学作品の翻訳の理解と質の向上へとつながることを期待したい。

### 【謝辞】

本稿を書くにあたり、Philip Gabriel 氏に大変貴重な情報をいただいた。また、金水敏氏、河原清志氏、千葉修司氏、Dane Hampton 氏に有益なコメントやご助言をいただいた。心から感謝の意を表したい。

### 【著者紹介】

山木戸浩子(YAMAKIDO Hiroko) 藤女子大学文学部英語文化学科准教授。Ph.D. (Linguistics, 2005 年)。専門は言語学(特に形態論と役割語研究)。

【註】

<sup>1</sup> 本論考は、金水敏氏が2016年に立ち上げた「村上春樹翻訳調査プロジェクト」の一貫で筆者が行った予備的考察が元となっており、日本通訳翻訳学会第18回年次大会において口頭発表した内容に加筆・修正を加えている。同作品(『海辺のカフカ』)の英語以外の言語による翻訳の考察は、『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(1)』(2018)に掲載されている(本報告書は大阪大学レポジトリで公開中)。

<sup>2</sup> アンケート調査の回答者12名は全て日本の大学で英語を教えている英語母語話者(年齢は38～61歳)であり、母語の内訳は、アメリカ英語5名、イギリス英語3名、カナダ英語4名である。

<sup>3</sup> 本稿では、二言語のテキスト間で翻訳シフトが認められる箇所に「対応」という言葉を当てることとする。これは、W. Kollerが「等価」と「対応」を対比させて、「翻訳の科学」と「対照言語学」とを区別している文脈における「対応」とは異なる点、付言しておく(Koller 1979)。

<sup>4</sup> アンケート調査の結果によると、“Much obliged.”はやや古体であり、例えば舞台が150年前の西部劇の映画でカウボーイが使うようなイメージがあるという。また、例えば、日本の戦国時代(1586年)を舞台とした黒澤明(監督)の『七人の侍』(1954/2006)に登場する主人公の一人、島田勘兵衛(演:志村喬)の台詞「かたじけない」は、英語字幕で“Much obliged.”と訳されている。

<sup>5</sup> 英語には軍隊の中で自分より階級・地位が上の人に対して使う言葉として“sir”と“ma’am”/“madam”があり、ナカタさんは実際に話し言葉の中で使用している。ただし、作品を通して計3回のみであり(p. 110, p. 116, p. 352)、それぞれに対応する日本語の発話内に「であります」が観察されないため、「であります」への対応であるとは断言できない。

<sup>6</sup> アンケート調査の回答者12名のうち4名が“fine ants”は(“finance”ではなく)“fine arts”の置き換えであると誤った予測をした。

【引用文献】

- Colina, S. (2015). *Fundamentals of translation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Kinsui, S., & Yamakido, H. (2015). Role language and character language. *Acta Linguistica Asiatica*, 5(2): 29-41. <https://doi.org/10.4312/ala.5.2.29-42>
- Koller, W. (1979). Equivalence in translation theory (A. Chesterman, Trans.). In A. Chesterman (Ed.), (1989). *Readings in translation theory* (pp. 99-104). Helsinki: Finn Lectura.
- Kurosawa, A. (Director). (2006). *Seven Samurai* [Motion Picture] (Unknown. Trans.). New York: Criterion. (Original work published 黒澤明(監督) (1954) 『七人の侍』東宝)
- Murakami, H. (2005). *Kafka on the Shore* (J. P. Gabriel, Trans.). New York: Alfred A. Knopf.
- Nida, E. A. (1975). Varieties of language. *Language structure and translation: Essays by Eugene A. Nida*. Stanford: Stanford University Press. (Original work published 1972)
- Yau, W.-P. (2014). Translation and film: Dubbing, subtitling, adaptation, and remaking. In S. Bermann, & C. Porter (Eds.), *A companion to translation studies* (pp. 492-503). Chichester: Wiley Blackwell.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏(編) (2014) 『<役割語>小辞典』研究社
- 金水敏 (2016) 「役割語とキャラクター言語」金水敏(編) 『役割語・キャラクター言語研究 国際ワーク

- シヨップ 2015』5-13. 私家版. 大阪大学大学院文学研究科
- 金水敏(編)(2018)『村上春樹翻訳調査プロジェクト(1)』私家版. 大阪大学大学院文学研究科
- 衣畑智秀・楊昌洙(2007)「役割語としての「軍隊語」の成立」金水敏(編)『役割語研究の地平』(pp. 179-192) くろしお出版
- 村上春樹(2002a)『海辺のカフカ <上>』新潮社
- 村上春樹(2002b)『海辺のカフカ <下>』新潮社
- 村上春樹(2003)『少年カフカ』新潮社
- 岡崎友子・南侑里(2011)「役割語としての「幼児語」とその周辺」金水敏(編)『役割語研究の展開』(pp. 195-212) くろしお出版
- 田中春美(編)(1988)『現代言語学辞典』成美堂
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男. 山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之(編)『新明解国語辞典 第七版』(2012) 三省堂
- 吉田理加・坪井睦子(2013)「社会言語学」鳥飼玖美子(編)『よくわかる翻訳通訳学』(pp. 166-167) ミネルヴァ書房
- 洋泉社編集部(編)(2013)『増補改訂版 村上春樹 全小説ガイドブック』洋泉社

